

### 3. ケインズの「一般理論」の主要理論を説明せよ。

1.主要概念：ケインズは、以前の新古典派と古典派の理論は多くのケースの一部であり特殊な場合の理論であるとし、一般の現実的なケースには該当しないと批判した。「一般理論」は個々の産業や個人における所得、利潤、貯蓄等を扱うのではなく、一国のようなまとまった総体としての所得、利潤、貯蓄等を扱うのである。いわゆるミクロでなくマクロを対象とするのである。個々の経済でうまくいった結論を全体のシステムに拡張することは正しくないとし、現代マクロ経済学を樹立した。

2.主要理論：ケインズは、失業の原因は需要不足により過小雇用水準で経済が均衡しているためであるとしている。これを不完全雇用均衡という。従来の考えでは、賃金が不満で働く意欲がない状態の「自発的失業」と転職中の状態である「摩擦的失業」の2種類だけであった。労働者は貨幣賃金で契約して働くが実質賃金や物価水準は決定できない。物価が貨幣賃金より高くなった場合、現在の貨幣賃金で働く意思のある総労働供給とその賃金での総労働需要とがともに現在の雇用量よりも大ならば、「非自発的失業」が存在しているとして、失業の新しい概念を加えた。

有効需要の原理は需要量により供給量が決まり、経済水準の大きさが決まるというものである。セイの法則とは逆で、需要が供給を決めるのである。雇用量を  $N$  人とし、それから生ずる生産物の総供給関数を  $Z = \phi(N)$ 、雇用量とその生産物の販売から予想される総売上金額を  $D$  としたとき総需要関数を  $D = f(N)$  とする。ある雇用量のとき  $D > Z$  であれば、企業は両者が一致する点まで雇用量を増加させ利益を得ようとする。一方、 $D < Z$  であれば、企業は雇用量を減らし損失を減らそうとする。そして、総需要関数と総供給関数との交点  $P(D=Z)$  における総需要関数の値  $D_e$  を有効需要という。図-1 参照。

消費性向とは、客観的及び主観的要因から所得に対する消費の関係を考察するものであり、 $C$  を消費額、 $Y$  を所得額とすると、平均消費性向は  $C/Y$  で表され、限界消費性向は  $\Delta C/\Delta Y$  で表され所得の増加分に対する消費の増加分である。消費関数を  $C = X(Y)$  とすると、限界消費性向  $dC/dY$  は正であり 1 より小さく、短期的に一定である。限界消費性向を  $\alpha$  とすると、 $\Delta C = \alpha \cdot \Delta Y$  となり、 $I$  を投資額、 $S$  を貯蓄額とすると

$$\Delta I = \Delta S = \Delta Y - \Delta C = \Delta Y - \alpha \cdot \Delta Y$$

$$\Delta Y = 1/(1-\alpha) \Delta I \quad \text{となる。}$$

これは一定の投資の増加により  $1/(1-\alpha)$  倍の所得増加をもたらすことを示している。したがって、所得は投資が大きくなればなるほど大きく、限界消費性向  $\alpha$  が大きいほど大きくなる。 $1/(1-\alpha)$  を投資乗数と呼ぶ。

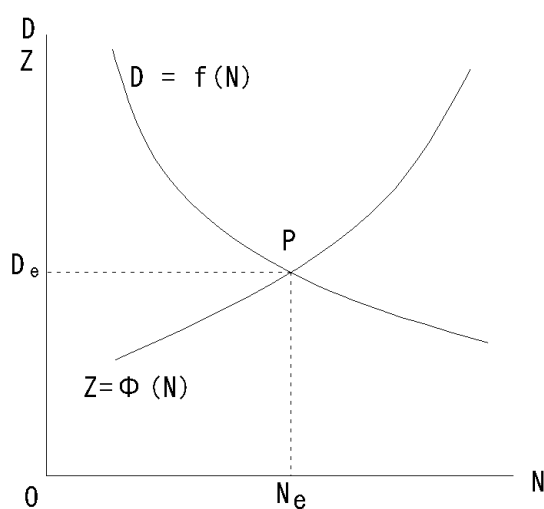
次に投資は何に依存しているかを考察して、ケインズは、投資の大きさは「資本の限界効率」と利率に依存して決定されるとしている。資本の限界効率は投資による予想収益と投資のために現在必要な資金調達コストに依存する。この両者を等しくするための割引

率が「資本の限界効率」である。投資額が増加すれば、資本の限界効率は低下する。投資額と資本の限界効率との関係を示す表が投資需要表及び資本の限界効率表と呼ぶ。資本の限界効率が利率より大きい場合は投資を行い、両者が一致する点で停止し投資の大きさが決定する。

次に利率は何により決まるのか。従来は貯蓄と投資の関係により決まるとされていたが、ケインズは、貨幣を保有するか又は利子や配当を産む他の資産を保有するかを選択することによって決まるものであるとした。これはまた、貨幣に対する需要と貨幣の供給量の関係になる。利率は「特定期間、流動性を手放すことに対する報酬である」と定義し、貨幣の流動的支配力を手放したくない度合いをあらわす尺度である。

貨幣需要は2種類あり、貨幣需要  $L_1$  は所得水準に依存し、貨幣需要  $L_2$  は将来の債権価格に関する予測（利率  $r$  の動向）に依存している。結果として利率は貨幣供給量と貨幣需要（流動性選好）によって決定される。

ケインズの「一般理論」は以下の3つの基本心理要因が基礎になっている。①心理的消費性向(消費性向) ②流動性選好に対する心理的態度（資本の限界効率）③資本資産から生ずる将来収益に関する心理的期待（流動性選好）。特に資本の限界効率と流動性選好は経済を不安定にする要因である。 (B)



図一 1